

渡辺克己著

豊後の
武將と合戦

【第十三章】 島津軍の豊後侵攻①



●原著案内

本デジタルブックは、以下の書籍「豊後の武将と合戦」をデジタル化したものです。

「豊後の武将と合戦」

著者：渡辺 克己

A5版 314 ページ

発行：大分合同新聞社

発行日：2000年2月15日

定価：2300円（税込み）



購入問合せ：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ
電 097-538-9662 「合同新聞の本」 Web ページ

※奥付け／デジタルブックについて

（題字と挿絵は二紀会委員・菅久）

- ① 島津義久の野望
- ② 関白の命も無視
- ③ 宗麟の大阪城伺候
- ④ まず筑前へ出陣
- ⑤ 四国より援軍到着
- ⑥ 豊薩緒戦の攻防

目次

【写真】 岡城跡

第十三章 ●島津軍の豊後侵攻 ①



岡城跡

① 島津義久の野望

— 内応の手、着々とうつ —

島津の大軍が豊後へ侵入してきたのは、天正十四年（一五八六）十月である。

大友宗麟が日向遠征で、島津軍に大敗したのは、天正六年（一五七八）十一月だ。あれから八年の歳月が経（た）っている。この八年の間、両国は平穏であったかといえ、そうではない。九州の覇者を目指している島津氏は、最大の障害である豊後の大友氏を討つ目標に向かって、周到な準備をすすめてきた。これに対して、日向の大敗で内部の結束の弱さを露呈した大友氏は、崩れかかった既得権の維持に躍起となりながら、島津の侵攻におびえ続けてきた。もともと島津と大友は、いったんは和睦（わぼく）の手を握りあっているのである。それは天下取りを目指す織田信長と、前（さきの）関白（かんぱく）近衛前久の口ききによったもので、天正九年（一五八一）三月ごろ和睦が成立した。大友氏はこの和睦は大いに歓迎したのだが、島津氏はしぶしぶの体であったようで、やがてなしくずしに破られてしまった。

島津方は、まず肥後・肥前方面の、島津へ敵対する勢力を討伐することを名目に北上を始め、次々と北九州の拠点を押さえていった。豊後攻略の包囲網を固めるためである。

一方大友方は、日向敗戦



を機に、あからさまに反大友の姿勢をみせてきた筑前・肥後の勢力を押さえ、地盤を守らねばならない。そのための行動をとる。

それは、北九州において大友と島津の間接戦争の様相をもみせてきて、やがて豊薩戦への抜き差しならぬ流れとなるのだが、大友方は守りの姿勢であり、島津方は攻めの姿勢であることに変わりはなかった。その間、中央の情勢は大きく変わっていった。

天正十年（一五八二）六月には、織田信長が本能寺の変で不慮の死を遂げ、天下は羽柴（豊臣）秀吉の手に移り、着々と国内統一の布石がなされていった。

翌十一年には、秀吉は大阪城を建て、十三年には、関白の位を得た。大友宗麟は、その秀吉にすがって、島津の侵略を阻止することを考えた。そこで大阪城竣工（しゅんこう）と関白になったことを祝う使者を上阪させた。天正十三年（一五八五）九月のことである。

祝儀の使者は、秀吉の好みそうな名刀や茶器、絵画など、高価な名品を献上し、祝辞の言上と共に、宗麟の書状を差し出した。その書状は、島津が大友へ戦いをいどんでいる九州の現状を訴え、ご威光をもつて九州に平穏をもたらせてほしい、と懇願したものである。

この訴えは聞き届けられた。十月二日付けで秀吉は島津へ、次のような内容の書状を送っている。

「関東、奥州などは、綸命（りんめい）（天子の命）によって泰平になっておるのに、九州が合戦を続けているのは何故か。

国郡境の争いについては後日双方の主張にもとづいて裁定する。豊後攻めの動きは直ちに中止すること。これは天皇の命である。この命に背くなら成敗する。よくよく分別して返答せよ」
厳しい内容のものである。この書状には、大名の細川藤孝(幽齋)らの添状がつけられてあった。この書状が島津へ届いたのは、翌十四年正月二十二日。三カ月半ほどもかかっている。

そのころ島津の当主義久は、豊後侵攻について連日軍議を開いていた。すでに肥後の大半は勢力下に収めているので肥後口から攻め入るべきか。これも島津支配下にある日向口から突入すべきか。同時に二つの口から侵攻する両面作戦をとるべきか。一方では豊後側の国境を準備する城主の一部に対して、島津への内応の手がうたれていた。島津側の資料によると、豊後南郡衆(大野・直入方面の城主集団)の中の五、六人が肥後の阿蘇氏を通じて「豊後侵攻のさいは味方する」と誓約したという。

② 関白の命も無視

——「落ち度はない」と島津側——

島津側には、大友のキリシタン傾斜のための、内部の弱点が手に取るように見えているから、勝利への確信は強まる一方であった。

このように戦機は熟し、作戦会議の最中に大阪城の関白秀吉から「豊後侵攻はやめよ」という書状が届いたのである。

「関白が天皇の御名で命令してきても、わしは豊後攻めを取りやめるつもりは毛頭ないぞ。皆の者は、関白からの書状に対して、どうすればよいと思うか」

島津義久は、関白からの書状を、重臣たちの面前に投げけるようにして語気を強めた。

「御意の通り。作戦続行に何ら異をはさむものはござりませぬ。

さりながら関白の書状を無視するわけには参りますまい。当方の事情を了解してもらうため、大阪へ返書を送るが穩当では…」

というのが大方の意見であった。ところが、

「当家は、鎌倉以来の由緒ある名門である。それに対して秀吉殿は、由来なき家柄の出と承知しておる。これを関白扱いして、返書を呈上するのは、当家の沽券（こけん）にかかわる。出すべきでない」

という強硬な意見が一部から出た。薩摩人の面目躍如たるどころである。相談の末、添状をつけてきた細川幽斎あてに出すことで、秀吉への返書に替えることにした。その手紙の内容も合議して作り上げた。次のようなものである。

「天正九年（一五八一）に、信長公、近衛前久公のお口添えによって、大友方と和睦（わぼく）してこのかた、当方は何ら態度に変わりはないのに、大友方が和睦を無視して、度々武威を構えてきた。それでも当方は、堅く和睦を守り続けてきたのであるが、近ごろ日向や肥後の国境において、大友方が犯すような態度を繰り返しておる。このような状況下では、当方としても、いかなる事態になるや、予測しがたく存じておる。当方



に落ち度はないことを了解いただききたい」

という、きわめて一方的なものであった。

大友宗麟は、大阪へ送った使者が「ただちに、島津に対して、豊後へ合戦をしかけることはやめよと命じるから安心せよ」という秀吉の言葉を持ち帰ったが、それで安心というわけにはいかない。国境を守るべき城主の離反が相次いでいる情報が入るし、秀吉の命令ぐらいで、たやすく豊後攻めを思いとどまる島津ではない、という危機感が宗麟らをいらだたせた。

この危機感は、キリスト教宣教師たちにも伝わっていた。

「豊後国には、肥後との国境に近い南郡と呼ばれる地方に、封録と領地を持つている幾人かの強力な城主である老中たちがいた。これらの城主は、必ずや豊後に対して反逆し、薩摩方に投降するものと推測されていた。それらの城主の最も主だった人は、入田宗和殿、志賀道益殿であり、そのほか多くの兵と立派な城を有する武将が幾人かいる」

と、宣教師の本国への報告に記している。

入田宗和（義実）は、義鎮（宗麟）が家督相続のさい起こした「二階崩れの変」と称されるお家騒動のさい、その首謀者と目されて殺された入田親誠（ちかざね）の子で、事変後許されて入田の津賀牟礼（つがむれ）城主となった。一時、筑前の笠木城勤番を、宗麟から命じられたこともある。

志賀道益（親度、ちかのり）は、北志賀氏として岡城の城主であった。妻は宗麟の先妻の連れ子で、宗麟からは信頼され重く用いられていたが、義統の侍女と不義があったとして勘気をこうむり、子の親次に家督を譲って岡城の支城である菅迫（す

がさこ）城に蟄居（ちつきよ）していた。入田宗和の手引きで島津に内通したといわれている。

このように、南郡衆の有力者の離反の推測がついているのに、これに対する有効な手を打つ才覚も力も、大友家にはなくなっていたのである。大友家を補佐する人材も不足していた。

③ 宗麟の大阪城伺候

— 秀吉が島津討伐を約束 —

豊後を薩摩の侵攻から守るためには、もはや秀吉の援軍に頼るほかない。宗麟はそう考え、自ら大阪城へ伺候して秀吉にじかに訴えることを決意した。

本来なら家督を継いで大友家の当主となっている義統が、隠居している親をわずらわさず上阪するのが当然のだが、義統には、そんな実力も積極性もない。宗麟にはそれが分かっているから、体もかなり弱っている隠居の身をむち打って、天正十四年（一五八六）三月、白杵から船で大阪へ向かった。

大阪城の関白秀吉に宗麟が謁したのは四月五日である。秀吉は諸国の大名が上阪し、ひざを屈して伺候するのをたいそう喜んだ。それは大名たちが、天下人となった秀吉の威光に伏し、臣従を誓う証（あかし）でもあったからだ。

九州の名門である大友氏が、先に祝儀の献物を届けた上に、宗麟本人がはるばる上阪したのだから、うれしさは格別だったようだ。

宗麟は秀吉に会った翌日、堺の妙国寺の宿から、大阪城に伺候した様子を、国元の重臣古荘丹後入道に書き送っている。そ

れには、大阪城の偉大さや関白から異例というほどの歓待を受けたことを、こまごまと感極まった言葉をもって書き連ねてある。

宗麟の上阪は成功であった。秀吉は島津討伐を固く約束した。また永年大友氏と宿敵関係にあった中国の毛利氏に和睦（わぼく）を命じ、毛利輝元と宗麟の間に和議が成立した。

秀吉の宗麟との約束は、ただちに実行に移された。四月十日には、毛利輝元・小早川隆景、吉川春元らに、豊後へ援軍を送ることを命じた。さらに討伐軍の指揮には黒田孝高（如水）、宮本宗賦が当てられた。

ところで薩摩の島津義久が細川幽斎あてに出した、秀吉への返書を持った使者は、宗麟よりも一足早く大阪へ到着し、島津側の言い分は、秀吉に届いているのである。これに対する秀吉の答えは、次のような九州分割案であった。

すなわち「肥後半国・豊前半国・筑後国・豊後国を大友氏に、肥前は毛利氏に、筑前は秀吉の直轄領、残る薩摩・大隅・日向・豊前半国・肥後半国を島津領とする。これに対する島津の回答は七月以内に上阪して行うべし。もし回答がなければ、秀吉自

身が九州に出向いて然（しか）るべき処置をとる」というものである。

九州和平のための分割案を島津に示しながら、その一方で宗麟に



は島津討伐を約束し、救援軍の派遣まで手配している。どうせ島津が承諾するはずはない。打つべき手は打っておくという、秀吉の読みがはたらいたのだ。島津の使者が、秀吉の九州分割案を持って薩摩へ帰りついたのは五月の末であった。島津では直ちにこれに対する緊急会議が開かれた。

「九州の大半に島津の威力が及んでいる現状を無視したこのような案は、一顧の価値もない」

という強硬意見が会議の冒頭から支配して、分割案への回答は無用、大友を討つべしと一決した。

注目すべきことは、薩摩では、戦争開始など国の大事にかかわることについては、神意を聴く習俗があることだ。武家一般に出陣に際し神前に祈るとか戦勝を祈願するなどの習わしはあるが、薩摩ではもつと深刻である。開戦すべきかどうか、出陣の日取りはいつがいいか、などまで信仰する神の託宣をいだけて、これを大事にする傾向があるのだ。

豊後侵攻については、本年（天正十四年・一五八六）七月までに開戦せよ。八月に延期はよろしくない。という託宣があった。これに従ってぜひとも進撃開始という決議がされた。

出陣の日程については、六月十六・七日が大吉日、七月は一日のほか吉日はない。という神意が告げられたという。しかし遠方の豊後に陣をすすめるには、時間的にこの日程では無理なので「調伏の矢」を吉日の六月十六日に、国境から豊後に射込むことで侵入に代えることにし、そのように実行された。

「調伏の矢」とは、敵を降伏させる神の祈りを込めた矢のことである。

④ まず筑前へ出陣

— 統虎、立花城守り抜く —

薩摩勢の豊後侵攻は決まった。島津の当主義久の率いる軍は日向口から、義久の弟義弘の率いる軍は肥後口から攻め入ることになり、従う重臣たちの手配もすんだ。

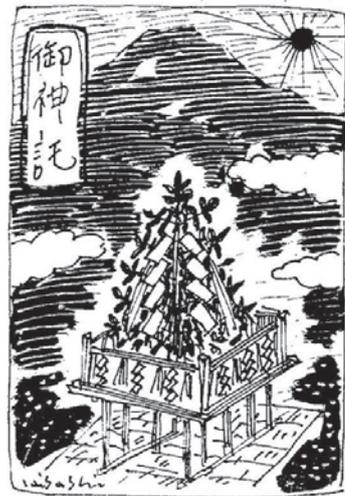
日向口には六月二十七日、肥後口には同月二十四日に所定の場所に集結することまで決まっていた。ところがにわかには豊後侵入計画変更の命令が義久から出された。それは義久が霧島岳の神に、筑前出陣と豊後出陣について神意を問わせたところ、託宣は筑前出陣のみに下ったというのである。筑前には大友方の名将高橋紹運、立花統虎らが守りについており、またこれまで島津に屈し大友を敵としていた筑紫広門が大友方に寝返っている。豊後攻めの前に、これらを討つべしというわけである。

それで、豊後出陣の日取りは数カ月後となった。島津の重臣の中には、朝令暮改の作戦に立腹した者もあるが、要するに開戦については、神意に問い、会議に会議を重ね、用心深く計画をすすめていることがわかる。

一方、関白秀吉は島津がいよいよ開戦へ向かって動き始めたと知って、七月十二日に、四国の仙石秀久、長宗我部元親（もとちか）、十河存保（そごうまさやす）の三人に島津討伐のための先手を命じた。

「四国勢が七月二十日に出船するはずであるから、豊後府中に上陸したら、仙石らと協議して落ち度のないよう。また黒田孝高ら大部隊も下向させる手はずを整えた」

と、秀吉は大友義統に知らせている。さらに書状は、「たと



え島津軍が合戦を挑んでも、援軍が到着するまでは堅固の覚悟で取り合わず、合戦は無用である」と、こんこんと諭してあった。島津軍は神意に従って、七月に筑前の大友の城を攻めた。筑前の岩屋城には高橋紹運（鎮種）、宝満城には紹運の次男統増、立花城には立花統虎、五箇山城には筑紫広門が拠っている。島津方は、義久の弟家久の率いる五万の大軍をもって、まず岩屋城を包囲した。岩屋城を守る兵力はわずか七百六十人であったという。これでは守りきれぬものではない。

家久は使者を送って高橋紹運に降伏をすすめた。この降伏勧告文の要旨を『豊後大友物語』（狭間久著）から借用すると、次のようなものである。

「当城で義死をとげんとする覚悟には感じ入るが、義者は不仁者のために死せずという。大友家は政治が乱れ、人のうらみを買い、キリスト教を保護して、古今未曾有の悪行を重ねている。そんな大友家に忠義だてして死ぬのはバカげている。降参しなさい」

むろん死を覚悟の高橋紹運が、誘いにのるはずはない。七月二十七日の島津軍の総攻撃で落城し、紹運は壮烈な戦死をとげた。

戦い終わって、紹運の懐中から島津家久あての書状が見つかった。これには、

「降参をすすめられたが従わなかったの

は、義の重きによってであり他意はない」

と丁重に礼を述べてあったという。「義の重き」に万感がこめられており哀切である。

紹運は、国東の吉弘一族の出で、一万田一族の高橋家を継ぎ、宝満城と岩屋城の城主となった。故立花道雪と共に北九州の守りの双へきであった。その忠烈ぶりは、岩屋城址（じょうし）に記念碑を建てて今に語り伝えている。

岩屋城の落城につづいて、宝満城と五箇山城も落ちたが、堅固な立花城だけは、統虎が頑強に抵抗して守り抜いた。長引くうちに、秀吉の島津討伐軍の大部隊が、黒田孝高に率いられて北九州に上陸するとの情報がいり、島津軍は八月二十四日、立花城攻略をあきらめて肥後へ後退した。

統虎は高橋紹運の長男で、立花道雪に乞われて婿養子となり、道雪亡きあとの立花城を守った。このとき二十歳であった。その勇武は秀吉の激賞するところとなり、後に宗茂と名を変え、名将の名をとどめた。

⑤ 四国より援軍到着

— 豊前鎮庄に出たが… —

関白秀吉による島津討伐軍が北九州に、また仙石秀久ら四国の援軍が豊後府内沖ノ浜に上陸を開始したのは九月に入ってからである。

秀吉が大阪城で宗麟に援軍派遣を約束してから五カ月を要している。秀吉は派兵をしぶっていたわけではなく、関白になったもののまだ政権が安定せず、諸大名の配置替えなど難しい問

題を抱え、秀吉直属の兵力を動かすのに手間がかかったとみるべきだろう。

この間、島津軍を筑前に引きつけて放さず、豊後侵攻を遅らせた高橋、立花ら城主の勇戦はたたえられてよい。

ちょうどそのころ、豊前も動揺していた。

宇佐の妙見嶽城は田原紹忍の居城となって久しい。豊前地方は、地頭の郷土集団があつて兵力を蓄えている。大友にとっては油断のならぬうるさい地帯であるが、紹忍が妙見嶽城に入ってからには、津からの手が回つたらしく、反乱が起きたのである。

反乱が起きれば紹忍だけでは難しい。府内へ注進が走り、鎮圧軍の派遣が要請された。

しかし大友義統には、自力で反乱を鎮圧する自信がなかった。義統を補佐すべき家老（加判衆）も乏しい。有力な家老であっても、自城に引きこもつて動かず、中には島津へ内応のうわさもしきりである。今頼りにしているのは、吉弘統幸、宗像鎮継、大津留鎮益、田北統辰ら家臣団である。だがそれら家臣の総兵力を集めても五千に足りない。

九月の末ごろには仙石秀久、長宗我部元親・信親父子、十河存保（そごうまさやす）ら四国勢が沖ノ浜に上陸、それぞれ府内に陣を構えた。

この四国勢は、強力な兵力を持って来たわけではない。北九州に上陸して南下する島津討伐の大軍と合流するまで、島津軍の侵攻を牽制（けんせい）する先遣隊にすぎない。といつても総兵力は六千。これだけの軍勢と兵糧を今治港に集結し、四国

の水軍が豊後水道を横切つて府内に送り込むのにおよそ一月月はかかったという。

豊前の反乱の知らせに、心細い思いをしていた義統が、続々と上陸してくる四国勢を迎えて、大いに意を強くしたことはいうまでもない。出迎えた義統は、来援への礼を述べる間もおかず、豊前の郷士たちの反乱を訴え、

「薩摩の軍が肥後、日向から攻

め入る前に、豊前の逆徒を討っておかねば、腹背に敵と対することになります。討伐の加勢をいただけませんか」と頼み込んだ。四国勢はこれに賛同し、大友合同軍が豊前討

伐に進発したのは十月に入ってからであった。この出動は、秀吉も承認したといわれる。

この豊前討伐は配慮が足りなかった。たかが豊前の郷土集団が背いたからといって、この重大時期に大挙して軍を移動させなくとも、秀吉の大軍団が南下してくれば、反乱は消滅してしまう。それよりも島津軍が侵入の機をうかがっている肥後口と日向口の警戒を強め、侵入に備えた国境の城塞を堅固にする手配こそ急務であった。情勢を熟知していない四国勢にそれを責めるわけにはいかない。当面の責任者である義統の将たる器の問題である。

豊後の中枢部が四国援軍まで引き連れて豊前に出払ってしま



い、府内はがら空きになってしまった。この好機を島津が見逃すはずはない。どつと侵攻を開始した。

肥後口より侵入した島津軍は、義弘を総指揮者とし、十月二十一日に豊後と境を接する阿蘇郡野尻（高森町）に着陣、翌二十二日には、すでに打ち合わせのできている津賀牟礼城主入田宗和、菅迫城主志賀道益の手引きで、祖母連峰西ろくの国境を越え、九重野の高城攻撃を開始した。兵力については、二万数千あるいは三万余と伝えられている。

これが豊後侵攻の緒戦である。

⑥ 豊薩緒戦の攻防

—— 降伏、抗戦さまざま ——

岡城の支城である高城は、緩木（ゆるぎ）山西方にある山城（比高三二〇メートル）で、志賀親次の臣、佐田常任（つねとう）、阿南勘解由之丞（かげゆのじょう）が守備にしていた。

小城であるから守兵の数もしている。島津勢は一気に攻め落とし緒戦を飾るつもりでどつと攻め登った。ところが思いがけぬ反撃をうけた。城側が敵襲に備えて、各要所につるしておいた大木や大石をどつと切つて落としたのである。島津勢は大損害をこうむつて山ろくまで退き、攻撃は慎重になった。伝承では、城の水を断つて落城させたという。

島津の兵が近くの農家に入って「この城の兵たちは、山の上で水に不自由しておると思うが、水はどこからくむのか」と尋ねると、老婆が自慢げに「水はなんぼでも飲めるそうじゃ」といった。島津兵が不審がつて「山の上にも水がわくのか」とい



うと「殿様が知恵のある方でなあ、水がかれんように祖母山の谷から埋樋（うめとい）を引いて、山の上に水を送るごと工夫しておるそうじゃ」と老婆はしゃべってしまった。埋樋というのは、地下に隠した水道のことである。これを聞いた島津方は「直ちに水を断て」とばかり、しゃべった老婆を殺し、埋樋の場所を捜して破壊した。このため間もなく城は落ちた。

島津勢は、高城の攻略を手始めに、手強い岡城（後述）は別として、竹田周辺の諸城を落とし、十二月には朽網郷（くたみ）（直入・久住）の諸城を攻め、次々と城主を降伏させた。

小城ながら、かなりの抵抗をしたあげくの落城もあったが、たやすく降伏し島津軍を迎え入れた城もある。

かねて内応していた入田宗和、志賀道益は別として、大友の重臣である志賀道運（久住・南山城） 朽網宗歴（久住・山野城）も、大友を見限り、戦わずして島津に降ったという。しかし異なった次のような戦史もある。

南山城、山野城とも激しく抵抗した。そこへ島津義弘からの降伏勧告状が届いた。降伏か最後まで戦うか、城内は両派に割れて混乱した。南山城の道運は、支城の縄張城に逃れて抗戦しここで戦死した。山野城の宗歴は病床にあつたが、降伏に応じようとする城内の弱気に怒って、自ら長刀を杖（つえ）に出撃し、陣中で倒れて息絶えた、という忠烈さを伝えている。敵へ寝返った者も、壮烈な戦死をと

げた者も、主家大友の凋落（ちようらく）を前にした家臣たちの悲惨を語るものだ。先に筑前岩屋城の高橋紹運が、島津家久の降伏勧告文の“義者は不仁者のために死せず”をとらず“義の重き”に死んだが、島津の豊後侵攻で、自城を大軍に囲まれた城主たちも、同様の降伏勧告文を送られたことだろう。そして二者のどちらを選ぶべきかに苦悩したにちがいない。

島津の大軍に囲まれ、抗戦の末落城した小さな城の中には、領民の女子供までも城にこもらせ死闘した哀れもある。領民をろう城させなくとも、激しい攻防戦となれば、領民の家は焼かれ、生命の保証はない。主家大友からの救援の望みもなく、踏みつぶされるしかないとすれば“不仁者のために死せず”の道を選び、領民の安泰を願って降伏し、不忠者の恥に甘んじた武将をだれが責めることができる。

一方、日向口に向かった島津軍は、当主義久は延岡に在陣し、国境を越えたのは弟の家久に率いられた二万余の軍勢である。延岡から北川の流れをさかのぼり、十一月十五日ごろ梓越（あずさごえ）の峠から宇目の里になだれこんだ。

この梓越の道は、先年日向遠征の大友軍が南下し、また惨敗の宗麟らが命からがら逃げ戻った道である。

宇目郷に入った島津軍は、梓越付近で迎え討つはずの、国境の要塞（ようさい）朝日岳城の城主柴田紹安の内応で、戦わずして深く侵入することができた。





オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタル版「豊後の武将と合戦」 第十三章●島津軍の豊後侵攻 ①

2008年8月29日初版発行

著者 渡辺 克己

原著 2000年2月15日発行／発行：大分合同新聞社

／制作：大分合同新聞社文化センター／印刷：小野高速印刷

《デジタル版》

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

(〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内)

©大分合同新聞社、渡辺克己、菅久

◇著者略歴◇渡辺克己
大分県佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、芸芸部の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退社。昭和二十七年から同四十二年まで大分市社会教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後の磨崖仏散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」等の著書。